



Weekly Market Report

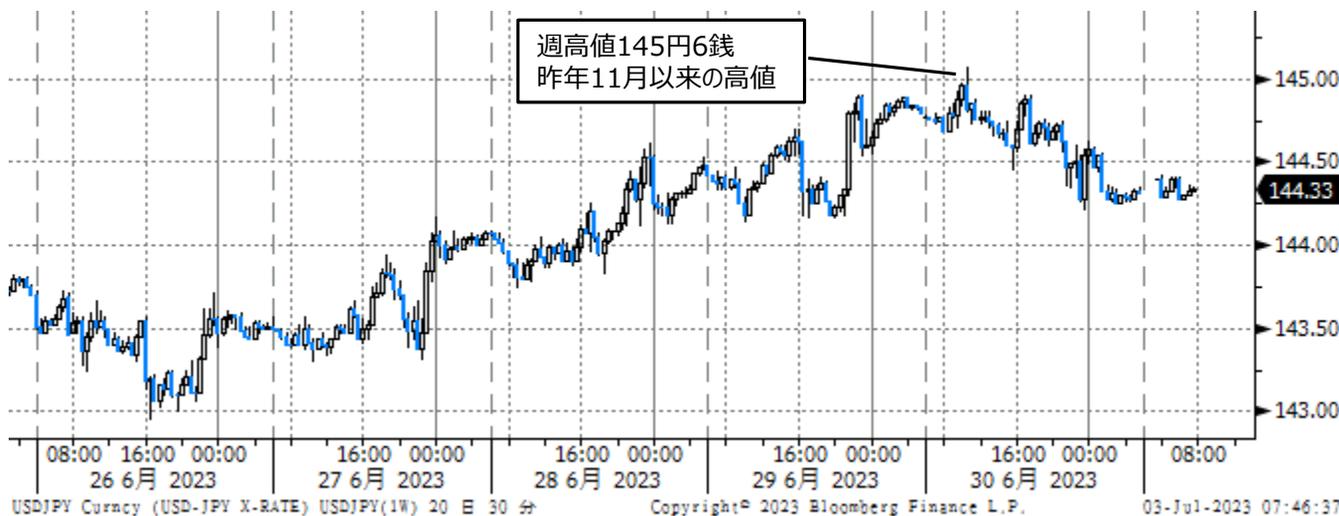
Jul 3, 2023

FX, JPY Interest Rate, Topics

1. 為替相場概況

連日高値を更新で145円台を突破。今週は重要指標多数あり。

USD/JPY (1週間の値動き)



コメント

(出所) Bloomberg

先週のドル円相場は、ドル買い円売り優勢。特に目立った材料のない中、週初から底堅い展開が続き、米経済指標の良好な結果やECBフォーラムにてパウエル議長がFOMCに引き続きタカ派の見解を示したこと、また植田総裁による緩和姿勢維持もドル円をサポートし週高値145円6銭を示現と節目の145円台を突破。ただ、145円台では本邦当局による介入警戒感により上値追いはならず、144円台半ばでの越週。今週は米ISM製造業・非製造業景況指数や雇用統計など週初的重要指標を多数控え、良好なデータが揃えばドル高円安に拍車がかかりやすい地合いだが、本邦当局者による円安牽制発言も強まってきている印象で警戒感根強くここからの上昇スピードは緩やかになるとみている。(市場商品部/CDG)

今週の経済指標 (予定)

日付	イベント	予想
7/3(月)	(米国) 6月ISM製造業指数	47.2
7/6(木)	(米国) 6月ADP雇用統計	24.0万人
7/6(木)	(米国) 6月ISM非製造業指数	51.3
7/7(金)	(米国) 6月非農業部門雇用者数	22.5万人
7/7(金)	(米国) 6月失業率	3.6%

USD/JPY (5年間)



(出所) Bloomberg

今週のレンジ予想 (USD/JPY)

予想者	今週のレンジ	予想のポイント
鈴木万里子	143.90 - 145.90	日銀為替介入の警戒感から上値は重いものの、円安基調は変わらず高か。為替相場に関するヘッドラインに注意。
一色梓	143.80-145.10	週末に米雇用統計の発表を控えていることや円買い介入への警戒感から上値が重い展開が予想される。

2. 円金利相場概況

米金融政策に影響を与える雇用統計に注目

10年国債金利と債券先物（1週間の値動き）



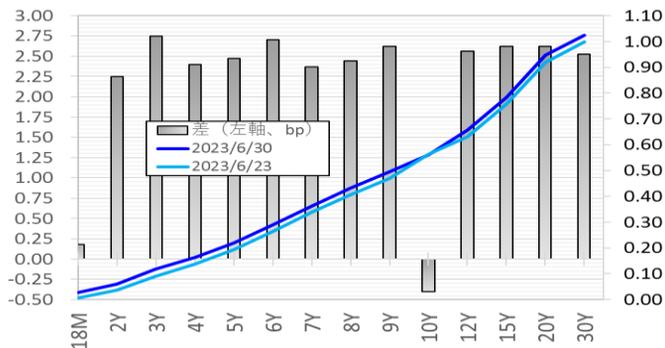
コメント

(出所) Bloomberg

先週の10年国債金利は0.36%～0.40%のレンジで推移した。週初は日銀が6月金融政策決定会合の「主な意見」を公表し、YCC見直しの早期検討を求める指摘が見られたことから、一時的に国債先物は軟調に推移したが、海外金利低下により次第に強含み149円台をつけた。27日の20年入札はテールが22銭と前回の4銭から大きく拡大、応札倍率も低下し軟調な結果となったことから10年国債利回りは小幅上昇した。週半ばには堅調な米経済指標を受け米金利高が進展する一方、国内2年国債入札は応札倍率4.26倍と堅調な結果となったことから、10年国債利回りは一進一退の展開となった。週後半には米1-3月期GDPの大幅な上方修正や雇用関連指標の改善を受け、米金利が一段高となったことから国内は超長期ゾーンを中心にベア・スティーブ化が進んだ。今週は米国では雇用統計発表が予定されており、FRBの年内複数回の利上げを下支えする結果となるかが注目される。(市場営業部/木田)

金利スワップ変化（1週間）

(%)



10年円金利スワップ推移（5年間）

(%)



今週のレンジ予想（10年国債利回り）

(出所) Bloomberg

予想者	今週のレンジ	予想のポイント
飯野りさ子	0.37% - 0.45%	27,28日の日銀決定会合を控え方向感が出にくい展開。7日発表の5月毎月勤労統計が堅調であれば金利上昇を予想。
小野口裕美子	0.38% - 0.42%	基本的にはレンジ推移を予想。ただし急速な円安進行により政治からの政策修正圧力が高まれば円金利上昇可能性も。

3. 今週のトピックス

2023年上半期の主要通貨対ドル騰落率

2023年上半期の為替相場は、日銀による金融緩和の継続を受けて円全面安の展開

<2023年上半期の主要通貨対ドル騰落率>

2023年上半期の主要通貨対ドル騰落率【図表1】は、英ポンド+5.4%、ユーロ+2.2%、豪ドル-2.0%、円-9.4%となり、4-6月で見ると、英ポンドの上昇と円の下落が際立っている状況だ。主要国10年金利の変化幅【図表2】をみても、英国の金利上昇幅がかなり大きく、これはインフレの高進を受けて、BOE（イギリス中銀）の利上げ見通しが主要国の中で最も強まっていることが背景といえる。一方で日銀による大規模緩和の継続が円の全面安につながっており、結果としてクロス円が大きく上昇、ポンド円は2015年以来の183円台、ユーロ円は2008年以来の157円台となっている。

なお、主要国における金融政策の状況は以下の通り。

◆米国FRB：6月のFOMCでは、10会合連続で実施されてきた利上げが見送られ、政策金利は5.00-5.25%で据え置きとなった。ドットチャートにおける2023年末の政策金利見通しではここからさらに2回の利上げを見込むタカ的な内容が示されたが、パウエル議長が会見で「今後の利上げはデータ次第」であることを強調したこともあり、市場の織り込む政策金利の年末水準は5.4%程度となっている。

◆ECB：6月に25bpの利上げを行い、預金ファシリティ金利は3.5%。インフレを抑制するために引き締めバイアスは強く、市場が予想するターミナルレートは3.9%程度。

◆BOE：6月に50bpの利上げを行い政策金利は5.00%。賃金インフレを背景にコアCPIの加速が継続していることを受けて、利上げ幅は5月会合の25bpから拡大。ターミナルレートは6.2%となっているが、景気の悪化懸念からどこまで利上げが実施できるかは不透明といえる。

◆RBA（オーストラリア準備銀行）：4月会合で利上げを一度スキップしたものの、5月、6月の会合で25bpの利上げを行い、政策金利は4.10%。市場ではあと50bp程度の利上げが織り込まれている。

<シカゴIMM投機筋ポジション>

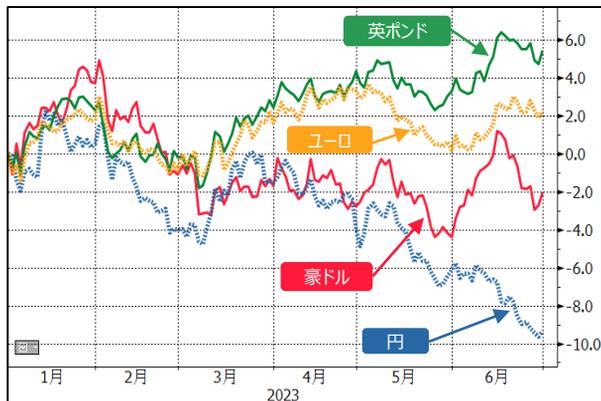
シカゴIMM投機筋ポジション【図表3】は、ユーロのネットロングが高水準を維持。ECBの強い引き締め姿勢とユーロ圏の経常黒字が背景にあるとみられる。一方、円についてはネットショートが10万枚超まで拡大。ここ数年の下限となる水準でもあり、投機筋の円売り余力はそれほど大きくないといえる。

<当面のドル円相場見通し>

主要国の金融引き締めスタンスに対して日銀が緩和を続けていることが円売りの背景となっているが、今後は米国景気の後退懸念やFRBの利上げ停止観測、為替介入への警戒感、日銀の金融政策修正への思惑から、ドル円相場の上値は徐々に重くなり、年末にかけては下落に向かうとみている。当面のドル円相場レンジは140.00-147.00円を想定。

(チーフ・マーケット・ストラテジスト／諸我 晃)

【図表1】 上半期 主要通貨対ドル騰落率(%)



(出所:Bloomberg)

【図表2】 上半期 主要国10年金利変化幅(%)



(出所:Bloomberg)

【図表3】 シカゴIMM投機筋ネットポジション(枚)



(出所:Bloomberg)

ご留意事項

- ・本資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、取引の申し込みでも、取引締結の推奨でもなく、売買若しくは何らかの取引を行うことを助言したり、または勧誘したりするものではありません。
- ・本資料の内容につき、当行はその正確性及び完全性を保証するものではなく、一切の責任を負いません。ご利用に際しては、ご自身のご判断をお願いします。
- ・本資料に基づき、お客さまが投資のご判断をされた結果に基づき生じた損害・損失等については、当行は一切責任を負いません。
- ・本資料は著作物であり、著作権法により保護されております。無断で本資料の全部または一部を複製、送信、転載、譲渡および配布することはできません。
- ・本資料に掲載された各見通しは本資料作成時点での各執筆者の個人的見解に基づいており、それらは必ずしも当行の見解を反映しているとは限らず、また、予告なしに変更される場合があります。



商号：株式会社あおぞら銀行（登録金融機関 関東財務局長（登金）第8号）
加入協会：日本証券業協会、一般社団法人金融先物取引業協会、日本商品先物取引協会